

写真に見る

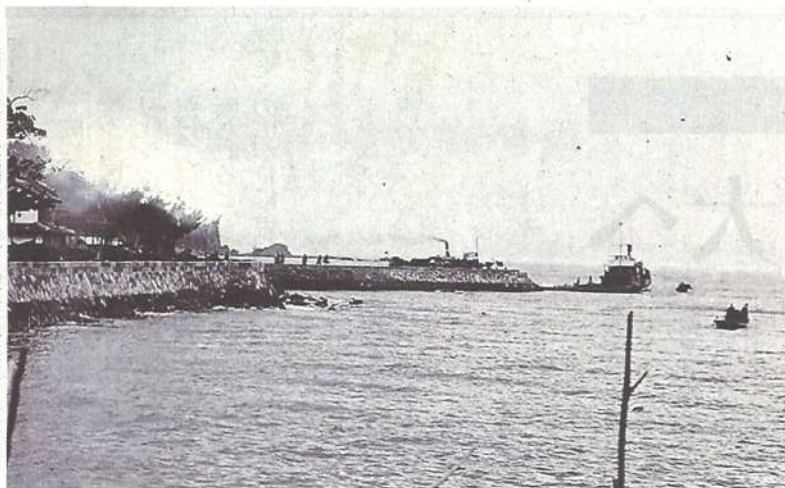
115年前の長崎

日露戦争時代

姫野 順一

□ 14 □

茂木港の突堤と浮棧橋に停泊する連絡船 (長崎外国語大所蔵)



茂木棧橋と茂木ホテル

上の写真に写っているのは、茂木港の突堤と浮棧橋に停泊する連絡船。茂木は小浜と、天草の富岡及び熊本を三角をつなぐ連絡船の寄港地であった。汽船の2隻は乗り換えのために同時入港しているようである。

明治18(1885)年の茂木港には蒸気船25隻、日本船1470隻が入港し、清酒、塩、茶、樟脳、椎茸、魚類など1万5千石(22500石)の貨物が入り出したとの記録がある。船による人と物の交流は活発であった。

この頃、若菜川河口に小さな棧橋が造られていた。ここは水深が浅く、人の乗降にボートを要したので、明治34(1901)年、棧橋の代用として突堤が築か

れた。長さ82尺、幅3・6尺、高さ4・5尺あった。時に沈み込んだ浮棧橋に着突堤の先には、長さ11尺の船している。浮棧橋3隻が付設されていた。明治20(1887)年、



3カ国語で名前が書かれた「宮下茂木ホテル」の看板(左) (長崎外国語大所蔵)

左側の茂みには、旧庄屋森岡平左衛門屋敷の外れの建物が見えている。下の写真はそこに新しくできたホテルである。

純洋式の下田ホテルが建てられ、33年のノースチャイナ・デイトリーニユース(上海)の雲仙紹介により外国人観光客が増加していた。長崎商船により茂木・小浜定期航路が開設されるのは大正3(1914)年のことである。

大正12年に始まった茂木鉄道株式会社による鉄道堀切工事の土砂を使って、茂木海岸の埋め立てが進められた。昭和8(1933)年、その埋め立て地先に新棧橋が築造されて突堤と旧浮棧橋は役目を終え、昭和30年の砂防堤工事で取り壊された。

長崎でロシア人相手のホテル業に成功し、「稲佐のお茶」と呼ばれた道永栄は、明治38(1905)年、若い頃に働いていたこの地の茂木ホテルを買い取り、大正13(1924)年まで経営した。ここは昭和3(1928)年に砂田三次郎が借用して茂木ビーチホテルとなり、大長崎建設の寮を経て昭和56年に解体された。

(長崎外国語大学長)

船での人、物の交流活発

随時掲載します